

瀬戸内・四国地域の 観光地域創生プロジェクト

せとうち観光専門職短期大学
安村 克己 学長



富士建設株式会社
真鍋 有紀子 社長



【内田】

こちらがせとうち観光専門職短期大学の安村学長と、私が学科長の内田でございます。
本日は私がファシリテーターを務めさせていただきます。
安村学長は日本で初めて観光学の博士号を取得された方です。

【安村】

私は文化と観光の関係に大変興味を持っておりまして、是非ともこの素晴らしい中津万象園
さんのお話を伺いたいと思っております。
どうぞよろしくお願いいたします。

【内田】

今回の対談は、富士建設株式会社 代表取締役の真鍋有紀子様でございます。真鍋社長、よろ
しくお願いいたします。

【真鍋】

今回、このお話をいただいた際に「中津万象園は決して上手くいっているわけじゃないんで
す」ということを申し上げましたら、「上手くいっている取り組みだけではなく、苦勞して
いるお話も含めて色々と聞きたいんです」と言われたのでそのつもりで来ました。
本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【内田】

ありがとうございます。観光の大学ですので、このような観光資源や文化資源には注目をさ
せていただいています。色々と勉強させていただきたいのでご協力よろしくお願いいたします。

本日は丸亀市にある中津万象園に来ております。まず始めに、真鍋社長から富士建設様と中津万象園の関係や歴史についてご説明をお願いいたします。

【真鍋】

中津万象園は 1688 年に丸亀藩の京極家によって作られたお庭と言われているとされています。

京極家は江戸時代が終わった時に東京に戻ります。京極家の手を離れてからは、民間の所有者を点々としましたが、やはりこれだけの面積がありますから、荒れてしまうことが度々ありまして、その度、所有者を変えながらなんとか民間の手で守り継がれてきたということです。



弊社が取得したのが昭和 45 年で、道路を作るとか再開発があるということで、不動産会社で普通に売りに出ているうちに年月が経ってしまい、これ以上荒らすわけにもいかないし、もちろん開発するわけにもいかないということで、自分たちで直そうと。

当初、自分たちで直せるとは思っていなくて、行政にお返しするつもりだったようなんですが、そうこうしているうちに年月が経ってしまい、これ以上荒らすわけにもいかないし、もちろん開発するわけにもいかないということで、自分たちで直そうと。

でも、どう直せばいいかわからなくて、お庭は設計図がないですし、古図がないのでどのように直せばいいかわからなかった時、ご縁があって知り合った中根金作さんという方に直し方をご指導いただくことができました。それで修復をして昭和 57 年に一般公開をしたということになります。

その後も放っていたら、これまでと同じように荒れてしまうので、少しでも資金源を作ろうということで、美術館を併設したということになります。

【内田】

昭和 45 年ということは 1970 年ですね。ちょうど前回の大阪万博、高度経済成長期の中、日本列島改造で中津万象園もどうなるかわからない時に手を差し伸べたということですね。

【安村】

この周りは工業化で、当時としては先端を走っていたような地区ではないんでしょうかね。その中で文化財を守っておられるということは、大変素晴らしいことだと思います。

【真鍋】

全国では今も大名庭園が無くなっています。ここ 10 年でも二つほどの大名庭園が無くなっているんです。大名庭園が残らなかった理由の一つが、立地が良いということだったそうなんです。学長がおっしゃったように立地が良いゆえに、開発されてしまったということがあるそうで、その中で残ったことは確かに特殊なのかなという気がします。

【安村】

ご苦労だったでしょうね。1970 年に所有されて、それから 1982 年ぐらいに、ですから 10 年以上かかって公開されたということですか。

【真鍋】

庭園の中に入っていただくと分かりますが、弊社は建設会社ですので、玉垣などに入っている名前を見ると、この人は設備屋さん、この人は畳屋さん、この人は内装業者さん、という感じで協力業者みんなで直したという感じです。

【内田】

富士建設のような建設業がサポートをしたことがうまくいったということでしょうか。

【真鍋】

そうですね。自社の重機で石を持ち上げたりできますので、その頃の社員の声を聞くと「俺は塀を作った」「俺は茅葺の屋根をずっと叩いてた」とか、そういう人がいます。

【安村】

そういう物語も素晴らしいですね。

先ほど申し上げましたが、観光と文化の関係に関心を持ってしまして。私も観光研究を始めて、今71歳ですが40年近くになります。

観光研究を始めたきっかけは、私の指導教員にバリ島に連れて行かれ「観光というのはこんなに社会や文化に影響があるものなんだ」というのを知りました。

後で聞いて分かったのですが、バリ島の文化は結構作り物なんですよね。ベースには元々ヒンドゥー教の古典がベースになっているようなんですが、ラーマヤナ、ケチャダンスとかですね。それからバロンダンスというのが有名で、後で聞いたら1960年代に作った文化らしいんです。それらが非常に芸術性が高いので、観光客に大変ウケたと。それが今度はバリの人たちの日常生活にまで入り込んでいったらしいんですね。観光用に作ったもののなのに。

それを見て私は「観光と文化の関係って面白いな」と思いました。文化はどんどん再構成したり、あるいは元の伝統に積み上げて作ることもありなのかなと。それはまさに、地域の持っている文化を人に見せる、見せてさらに文化を磨き上げていく、というような文化のあり方もあるのかなと思いました。

先日こちらの庭園を見せていただきました。やはりこういう庭園もどんどん磨きをかけて、どんどんアレンジして素晴らしい文化になって、地域に愛されているのかなと。もう既にそのような試みを随分にされていると思いますが、その辺のお話をさらに伺えたらなと思っております。

【真鍋】

2006年にメセナアワードという賞を頂いたのですが、その時に中津万象園について注目されるのは、建設会社が取得して荒れた庭園を直した、という部分だけで。受賞の時も庭園について話そうと思ったら、全然分からなかったんですよ。「そもそもこの庭園で何をしてたの？」というのが分からなくてですね。その時に「大名庭園 遊び方」で検索すると、京都芸術大学の日本庭園・歴史遺産研究センターという研究機関が出てきたんですね。大名庭園の研究もしていたので、電話して「大名庭園について何もわからない」というお話をしたら、ちょうど大名庭園講座を開講していました。それに参加した際に初めて「見る庭園」ではなく、中で宴会をしたり、各場所でいろんなことをしながら、半日かけて歩きながら「遊ぶ場所」だったということを知りました。

その時に「庭園というのはあまりにも大きいし、維持費がかかる」「使い道がないと建物み

たいに常にそこにあるということではないから、時代に合わせて役割が変わっていくのが当たり前です」と言われたんですよ。

先ほど学長がおっしゃったような、まさにその通りのことが多分過去にもあったんだろうなということをその時に思いました。

【安村】

なるほど。それはメセナアワードを表彰されるでしょうね。

普通メセナというのは、補助金や助成金を出しましたというのがありますが、これだけのものをきちんと維持されていますから。

現在、真鍋社長は先代の意向を受け継がれて、富士建設の三代目になられるわけですか？

【真鍋】

そうですね。祖父が中津万象園を買って直して、父が受け継いだのですが、父もどうすべきか迷ったらしくて。ただ祖父が亡くなる前に「お前どうせ売るんやろな」と言われて「いや、そんなことはしないよ、ちゃんと守るよ」ということを言ったのが、父自身も自分の呪縛になっていたみたいな話をしていました。

ただ、私がここを引き継ぐとなって、もうここまで守ってきたものは、多分これから守る以外の選択肢はないと思うんですよ。売るにしても、誰かにお願いするにしても、文化財が形を変えることはあり得ないじゃないですか。ただ一番思うことが、こういう事業をするのはキレイ事じゃないということです。自社の社員に対してどう説明していくのか。中津万象園を守ることが前提にあったとしても「中津万象園に寄付をしてるから、俺たちの賞与は上がらないんでしょ」みたいになるとおかしいじゃないですか。社員にしわ寄せがいかないような守り方ってどうなんだろうとか。このまま一企業で維持管理を続けるとなると、多分どこかで必ず無くなると思うので、守ってくれる人を増やすということを考えて、形を変えながら守りたいなと思います。

【安村】

ただ事じゃないですよ。文化を守っていくというのは。

やはり経済的な面というのが非常に大きく出てきますよね。

【内田】

地域との関わりで、地域のサポーター募集もされているので、それなりに参加してくださっていると思うのですが、その辺りはご苦労も含めてどうなのでしょう？

【真鍋】

地域との関わりが元々はあまりなかったんです。私が入社したのが平成10年、その頃はうちの父によると「ここを守っているということは決して好意的には受け取られないから、人には言わない方がいい」みたいな感じだったんですね。その反発もあってメセナアワードに応募したところもあります。

平成10年に財団法人を設立して、平成24年に公益財団法人にして、その過程で商工会議所の会頭さんや、地域のキーマンとなる方が「一企業が持っているかもしれないけど、中津万象園は地域の宝物なんじゃないの」「守らなきゃいけないんじゃないの」と言い始めてくださって。それまでは固定資産税もかかってましたし。

例えば、丸亀市が丸亀城で観光事業をする時も一緒に宣伝するということはなかったのです

が、みんなに応援してもらえそうな公益性を持たせようという形で動き始めてから、ようやくお城と大名庭園のセットで観光 PR をしてもらおうとか、固定資産税が免除になるとか、地域の広がりみたいなのがちょっとずつ出てきた感じです。

【安村】

丸亀美術館の併設、あれはいつ頃から？

【真鍋】

オープンする際に庭園だけだと人が来ないということで美術館を作りました。



【安村】

私が先ほど触れたバリ島の件ですが、再構成というのも先ほど例にあげたケチャダンスとかバロンダンスも新しくしているらしいんですね。すでに色々工夫されていると思うのですが、このような庭園を所有していることは非常に重要なことですが、いろんな箇所で魅力的に見せると

いう工夫をしていったらいいんじゃないかと思うんです。良い例かわからないんですが、プロジェクションマッピングのような魅力を高めるような。あるいはイベントですね。すでに色々となさっていると思うのですが。絵の好きな京極高豊公にちなんで写生会をやられたりもするんですか？

【真鍋】

毎年、子どもを対象とした写生大会を開催しています。ですが、建設会社が主催するイベントなので、運営はあまり上手じゃないんですよ。あとやはり予算が限られてますので。

庭園が文化財に指定されているので、基本的に改変することは良くないんですよ。庭園の奥に鳥居があるんです。元々は伏見稲荷大社の分社の神様の前あたりだけだったのですが、それを数年前に竹林の中に鳥居を造り、101本に増やしたんですね。あれは教育委員会から「文化財に勝手に鳥居を作ってはいけない」と注意を受けました。でも来園者は喜んでますけどね。

私たちだけの力では、新しく何かをすることが難しいという、すごく引け目がある。

丸亀市がこれからSDGsのサステナブル観光としての取り組みをしていくということで勉強会をしたんですけど、その時に「新しい取り組みは何かないですか」とみんなに聞くんですよ。レオマさんは生ゴミの問題をコンポスト事業化したりとか、すごい取り組みを言うんですよ。

弊社は松の剪定ゴミを仁尾町のレモン農家さんに引き取っていただいて、グランドカバーにしてすごく美味しいレモンができたんです。その話をしたら丸亀市が「ちょうど丸亀市に移住してきたレモネード屋さんがいるので、そこでレモネードにしましょう、循環して面白い取り組みができますよ」と言ってくださって。今はそれを素材にしてPRしてくれています。でもそれ以外のことはあまりできていないんです。

【安村】

今の観光地づくりや観光開発を見ていると、演出が上手なディレクターを東京や大阪から呼んできて、商品を開発したり、魅力づくりをしたりと、やっているようですがかなりの費用が必要らしいんですね。

こちらの場合は、きっとこの庭園を見せれば地元人材で手を上げてくれる人がいると思うんです。

先日庭園を見せていただいた時も、私の知人に相談してみたいと思いました。

【真鍋】

是非お願いします。補助金を取るのに「ここを舞台にやりませんか」と時々企画を持ち込んでくださる方がいらっしゃるんです。

そういったことが増えていくとすごくいいなと思います。弊社より上手に企画する人はたくさんいるので、是非お願いしたいです。

【安村】

人にはそれぞれ色々な特技がありますよね。

私は家が奈良県にあり、奈良には依水園という庭園があります。あそこは少し客足が停滞していた時があり、私が奈良県立大学にいた頃に学生を動員して、春日大社や東大寺の方にも協力いただいて、依水園の一画で市民講座を開催しました。それが結構好評だったんですね。最初の話題は依水園に関わること、あとは文化的な話題で色々やりました。

そういうことをされたりしてるんですか？

【真鍋】

いや、していません。昔はオリエントセミナーをやってたんですけど、それ以来全然してなくて、むしろ大学のサテライト教室のような形にさせていただいてもいいかもしれません。

【安村】

できたら我々のせと短もこちらの場所をお借りしながら、講義をできればと考えております。

【真鍋】

是非お願いします。

【内田】

ここはすごい立派なのでもっと活用できたらいいなと思いますね。

さっきの話で街の中心地だったら、もう今は庭園として無くなっている話だから痛し痒しですよ。街に近ければもっと来園者が来るかなと思ったりもします。

【真鍋】

アクセスが悪いんですね。観光客の方は丸亀駅と讃岐塩屋駅までは、電車で行くことはできるんですけど、そこから中津万象園までのバスがないんですね。「丸亀駅からタクシーに乗ってください」「レンタサイクルを借りてください」という案内になるので、ちょっと不便なのかなと思ったりします。

【内田】

侘び寂び系のお庭じゃなく、いかにも日本庭園ですからインバウンドの方は、すごい興奮しそうな雰囲気だと思います。

【真鍋】

丸亀市教育委員会の文化財担当の方が、「中津万象園の松はこれから来る！」ともう何年も言ってくださるんです。

【安村】

外国の方はあまりロケーションは関係なく、ここがいいと思うと来るんじゃないですか。

【真鍋】

多分あまり PR ができていないんだと思います。どうやって PR すればたくさんの人に来ていただけるかが、わからないのもあるんです。

【安村】

何がきっかけで集客になるかわからないですからね。

直接中津万象園に当てはまるかどうかかわからないのですが、奈良の若草山の土産屋で、それこそ奈良と言えば、修学旅行生がメインの商売相手だったんですよ。こういったらなんですけど子ども騙しなものを土産屋で置くんですね。そして修学旅行シーズン前は「修学旅行で私どもの店舗に来てください」と言って、全国の小中学校に営業に行くらしいんです。

ところが私の友人は小学生、中学生、高校生を相手にする土産屋を辞めてしまったんです。何をしたかという、奈良の文化財に近い一刀彫の人形や書道の道具、特に有名なすずりといった割と高価なものを土産物として並べたんです。また、外国人観光客相手に、書道体験をさせたらいいんです。そうしたらこれが大ヒットしました。あまり PR もしていないのですが、口コミ等で広がって、ガイドブックにも載ったりしてですね。外国人観光客は結構財布の紐が硬いらしいのですが、自分が気に入ったものには高価なものでも買うらしいです。そうすると書道の道具一式とか、一刀彫でも何万円、何十万円も買って帰ったりしてですね。高付加価値の観光と言いますが、そういう要素はこちらもあるんじゃないでしょうか。

【内田】

一般的に四国はロンリープラネットにも書いてあるように、比較的文化水準が高い、インテリの外国人観光客がやってきて四国霊場八十八カ所を巡る人がいるので、きっとこの庭園を一度知ったらかなりアピールできると思うんです。

【安村】

建物もいくつかありますが、また新しいものをどこか作る予定とかは？

例えば、飲食店や土産物屋、もちろん色々お金もかかりますが。

【真鍋】

指定文化財になるので文化財エリアに指定されてるところには建てられないんですね。

ただ、飲食店（懷風亭）の向こうの美術館の辺りの、すでに新しい建物がある辺りは指定文化財から外れているので、そういうところであれば建築も可能です。それと運動公園の裏に広場があるんですけど、あそこは宿泊施設といったものを建てる余地があると思います。

【安村】

そういう風に色々有機的に広く考えていくのもいいのかもしれないですね。

【真鍋】

そうですね。そんな風に可能性があると思っていただけたら嬉しいです。

【内田】

それでは次の話題にいきます。真鍋社長は、建設会社の後を継がれたわけですが、畑違いの学部を卒業され、しかもこういう文化施設もやっておられるということで、真鍋社長の今までのご経歴の辺りをご披露いただければと思います。

【真鍋】

本来であれば建築の方に進むのが本筋だと思うんですけど、進学先に法学部を選んだのは物理ができなかったからなんです。あと父に大学を選ぶ時に「技術的なことは社員のみんなが分かっている」「みんなそんなことは期待しないから、法学部とかで考え方を学ぶというのでもいいんじゃない？」ということで文転して、法学部の推薦をいただいたので法学部に進学しようと。一応受験したのも経営学部でして。そこで建築の方に進むということはしなかったんですね。



就職は、そのまま富士建設に帰ってきたのですが、ものづくりから入っていないので、建設業の面白さや魅力というのも分からないですし、中津万象園についても、小さい頃から馴染みがある場所ですけど、どういう苦労があるのか、そういうことは全くわかっていなかったんです。入社してから何が面白いのかとか、どういうところがやりがいなのかとか、中津万象園はどんな問題があるのか、ということを徐々に知っていった感じです。

就職は、そのまま富士建設に帰ってきたのですが、ものづくりから入っていないので、建設業の面白さや魅力というのも分からないですし、中津万象園についても、小さい頃から馴染みがある場所ですけど、どういう苦労があるのか、そういうことは全くわかっていなかったんです。入社してから何が面白いのかとか、どういうところがやりがいなのかとか、中津万象園はどんな問題があるのか、ということを徐々に知っていった感じです。

【安村】

先ほど伺ったのですが、社長になられた後に色々勉強もされたんですね。

大学に入られる時にはもう後を継いで、富士建設にというお考えはあったんですか？

【真鍋】

私は二人姉妹の長女ですので、前提として当然富士建設を継ぐということなんですが、よくある話で「有紀子さんが誰かと結婚したら、結婚した相手が社長やで」みたいな感じだったんですよね。ですので入社時は経理や総務といった内勤関係をやっていました。中津万象園は母が担当していたので、その後は「あんたが中津万象園をするんやで」みたいな感じだったんです。

それが働くうちに「なんで社長は旦那さんじゃなきゃいけないの？」と考え、「想いがあるんだから私が社長をやる」といった感じで現在に至ります。

【内田】

大学進学の話ですが、香川県は県外流出がすごく多い県です。ご自身も東京へ進学されて、家業のこともあったと思いますが、このまま東京で暮らそうと考えたことはありましたか？

【真鍋】

就職活動の際、あの頃は人材の青田買いで人をどんどん採用する時代でもありました。ですが、このまま東京で働くという気持ちはなかったんですよ。とにかく満員電車が嫌で。それに富士建設の創業当時から総務経理を担当している方々から「みんな帰ってくるのを楽しみ

にしているし、早く引き継ぎたいから帰ってきなさい」と言われていたので香川に戻ったということです。

【安村】

東京には学生時代の4年間いらっしゃったんですか？

4年間は長かったですか？

【真鍋】

大学街の喫茶店でアルバイトをずっとしてまして、楽しくやっていました。



【安村】

私は首都圏で40年近く過ごしていて、仕事の関係で北海道の北見市で住むことになりました。それまで東京こそが日本の生活だと思っていたのですが、それが大きな間違いでした。

北海道の北見市は大体11万人くらいの都市です。北見市での生活は人

生感とか生活感が変わりました。東京にいた頃は色んなことにお金がかかるんですね。食べるもの、着るもの、生活費といった、東京でお金を消費していた場所が、北海道にはないんですよね。人の生活にとって何が大切なのかを考えさせられました。それ以来、地方を転々として、そして今、香川に住んでいるということです。東京に戻りたいかという、あまり戻りたくないというのが本音ですね。妻も東京の人間ですが、もう戻らなくてもいいよ。真鍋社長は大学時代に観光客になったような気持ちで、東京を色々巡られたりしましたか？

【真鍋】

大学で「なべの会」という野草を食べるサークルに入っていました。そのサークルの活動が近場ですと奥多摩に行ったり、東京を起点に日本アルプスに行ったり、東北の山に行ったり、利尻島や礼文島へ行ったりしました。関東の有名な観光地を巡ったという感じはないですね。東京という場所そのものには、あまり未練はなかったんですけど、香川に帰って来ると友達がいなくなっているんですよ。同級生は県外に出てる友人が多かったですし、連絡がつかない友人もいて。会社に入っても、会社の人とは友達ではないので、友達がいらないということが少し不安でした。でも、勤労者山岳連盟という存在を知り、山岳連盟に入って年齢層は年上の人が多いんですけど、山仲間ができました。そういう縁ができ始めると「あ、香川でも大丈夫かな」という感じになりました。

【安村】

本学はせとうち観光専門職短期大学という長い名前ですが、みんなはせと短と呼んでいます。せと短に入学する香川県外出身の学生は、やはり瀬戸内海に魅了されて入学する学生も多いんですよ。だけど、なぜこんなに香川の人とは県外へ出てしまうのかなと感じますね。

【真鍋】

この間、高松高校で生徒のプレゼンテーションを聞く機会があったんです。

プレゼンターとして選ばれた生徒7~8人中、男子生徒1人だけだったんですよ。残りはみ

んな女子生徒で。こんなにしっかりした女子生徒たちが選ぶ進学先はどこなんだろうと思いました。

【安村】

そうですね。奈良県も県外に出ますよね。

【内田】

これは個人的な話になりますが、私は三重県の北の方の出身なのですが、同窓会は東京でするしかないんです。同級生のほとんどが東京や名古屋にいますので、だから東京で同窓会という悲しい地方の現状です。

【内田】

それではテーマを変えます。新入社員に期待する将来の人材像を教えてくださいませんか？



【真鍋】

中津万象園の仕事もありますが、弊社の本業は建設業です。私は両方に関わっており、中津万象園の仕事をして一番に思ったことは、先ほども申しましたが、文化を守るということはキレイ事じゃないということです。

経済と文化を両立させることがどれほど大変かというのを、一番叩き込まれました。それがあったので、地域密着型のクラウドファンディングサイトが香川県になかった時に、それを起ち上げて運営するということをやりました。地域の金融機関と行政の人と企業の人、みんなが連携してくれたんですよね。連携してくれた理由はおそらく事業の意義が良いというのもあったと思うんですが、弊社が中津万象園を運営してきたので「富士建設が言うことだから本当にそう思ってるんだろうね」と信じてもらえたところがあったんです。

クラウドファンディングの事業が終わって、本業の建設業に戻った時にいろんな経営者の人と接していて「お金儲けのためだけに仕事をしている人って少ないな」と一番思いました。クラウドファンディングもそうですけど、やりたいことや叶えたい夢みたいな大義があって、それを叶えるためにお金を集めるじゃないですか。世の中の中小企業のほとんどの人が、本業を通じて同じことをやっているなというのがあったんです。

そういう経験を通じて、ファンドレイジングという考え方を持った人材がいいですね。ファンドレイジングはNPO等が資金調達をすることを指しますが、資金調達の裏側でその事業

に賛同し、自分たちも参加して世の中を変えていくための仲間を増やすということ、ファンドレイジングにはそうした側面もあります。民間企業も同じだと思うんですね。私たちも自分たちがやっていることに賛同してくれる人や共感してくれる人を、お客様にして増やしていくので、多分民間企業も NPO もどちらも同じだと思います。そういう共感者を増やしていくこと、だからと言って経済を馬鹿にしない、それは両輪じゃないと回らないということをやを正々堂々と見つめられるような人材がいいなと思います。

【安村】

元々、富士建設は「建築は文化である」ということで、真鍋社長も生活や社会などを創っていくということをおっしゃっていましたが、初代の方から受け継がれた企業の文化ということなんでしょうか？

【真鍋】

祖父は「自然の中にあればそれだけで綺麗な木や石がある風景の中に、人工物を作るんだからいろんなものとの調和や、それ自体が美しいということを考えなければいけない」と言っていました。

私も文化や生活、人生や社会を変える力があると思うようになったのは建物が元々「こういうことがしたいから、こういう建物を建ててください」というのが建てりにあります。ですが逆を返せば、こういう建物ができたからサービスが制限されてしまうとか、さらに広がる...みたいな逆向きもきっとあるんだろうなと。

例えば今、床の間や畳はあまりないじゃないですか。でも、例えばどこかの公共空間に床の間があって、季節ごとに飾り替えていったらごく当たり前にそういうものが残りますよね。他にも交流を生みたいと言いながら、真ん中に廊下があって左右に教室があるような学校形式の建物を作ったら、交流は絶対生まれないじゃないですか。

でも逆に、一つの空間で人が交わるようなものを建てたら、意図せず交流が生まれるじゃないですか。ソフトからハードが生まれるけど、ハードが社会に及ぼす力みたいなものもある。「建築ってそれがカッコいいよね」みたいなことが言いたくて、その言葉を使ってます。

【安村】

やはり初代から受け継がれた、文化との関わりや社会との関わりをすごく感じますよね。

本当に中津万象園に象徴されてるような気がしました。

先ほどのお話もそうですけど、文化の保護や創造は確かにキレイ事じゃないと思います。かと言って先ほどのように色々工夫されて地域も巻き込んで、経済的にもうまく調和させようとしてるということは、本当に素晴らしいなと思います。

それは本当に大学教育もそうですね。これも言うてみれば、大学教育もキレイ事じゃないと思うんですね。先ほどのお話で気づいたのですが、ファンドレンジングは大学を創る時にも実業家が入ってきます。それも決してお金儲けのためではなく、純粋に本物の大学教育を考えたいとのことで入ってくるようになりました。

世の中が文化や教育を含めて、それと経済とを結びつけて上手くやっていこうという動きがあるのでしょうか？

先ほどのお話を伺っていて「あ、そうなんだな」と妙に納得します。真鍋社長の考え方、想い、姿勢というのはだんだん醸成されて築き上げてきたのでしょうか？それについても中津

万象園が関わっているのでしょうか？

【真鍋】

昔はそんなに深く考えていなかったと思うんです。中津万象園で元々経理をしていたから、こんな大変なんだということが分かって。それで庭園のことを知りたいとなった時、中津万象園は大名庭園だからみんなが遊んでいた場所だったことが分かって。じゃあみんなは何をして遊んで



いたんだろうと調べると、お茶をしたり、歌を詠んだり、色々な遊びをしていたことが分かって。その時に、お茶といえば香川に中條文化振興財団という団体があって、お茶で遊ぶということをやりたいと相談したんですよ。その時に教えてもらったことが、企業の方が例えば海外へ行った時に「特別なこととして日本文化を語るんじゃないくて、もっと自分たちに根付いたことでないとだめだよ」ということを言われ、例として教えてくれたのが近代数寄者さんの話だったんです。近代数寄者という存在の話を聞いて家に帰って探したら、熊倉功夫先生の本がありました。それを読むと、近代数寄者は昔、経済界でもトップの人たちが、日本文化を守るために文化の流出を防ぐということで、茶の湯などを通じてご自分で文化を守り楽しんだ…とありました。その熊倉さんの本に実際にどんな遊び方をしたかが載っていたんですよ。それがものすごくかっこよかったんです。

経済的なことを第一線でやりながら「趣味とは教養である」ということで、文化的なこと、教養的なことを趣味として遊んでいく。何かむちゃくちゃかっこいいなって思いました。こういう人が香川県に増えたら香川県もすごくかっこいいんじゃないかと考え、大学の先輩の経営者さんに声をかけて、一時期、中津万象園でお茶会をしたりしていたんです。「こういう風になったらかっこいいと思うんで、ぜひやりませんか？」とか言って。「妄想だよ」とか言われながらやっていたんですけど、でもその頃に来てくださった人たちは、今でもすごい楽しそうに話してくれるんですよ。なので、多分本当はみんなやりたいんだと思います。本当はみんな経済だけじゃなくて、文化とか遊びとかそういうこともやりたいんじゃないかと思うんです。

【安村】

日本の経済が少し傾きかけて、遊ぶことの心のゆとりが少なくなったのかもしれないですね。

【内田】

逆に成熟した日本はイギリス化してるというところもあるので、もう行くところまで行ってるから、あとはどう豊かになれるかというところですね

【真鍋】

そうですね。山口周さんのファンはすごい周りにも多いですからね。

【内田】

せと短の学生も連れてきて、アイデアを色々出し合って、上手く活かすことができるといいですね。

私も大学教師を40年近くやっており、昔は高度経済成長期だからともかく出世を目標にするという風潮ですけど、今の若者はあまり出世したいとか、儲けようとかよりも豊かに生きたいみたいな。プライベートで豊かに生きるというのもあるんですが、割と公共性も持っているんじゃないかと期待しています。

そういう意味では、中津万象園を見ていたら企業と文化のあり方や、観光と文化のあり方を色々考えられるすごくいいテキストになるような気がします。



【安村】

こういう工業地帯のような中にあって、大きな道路も走っていて、普通の公園だとなんか借景があって、というのはありますよね。

おそらく昔はここで瀬戸内海が開いていたのかもしれないですが、かえてこういうロケーションの中で中津万象園を守っているというさらに

文化を創造していく物語ができれば、それが売りになって素晴らしいんじゃないかと思います。まさにそれをやられている最中だと思います。

「ここに中津万象園があるんだ」ということがストーリーになったら面白いですね。

【内田】

観光と文化、企業と文化のあり方について、色々ご教授いただきましてどうもありがとうございました。

本学も観光の大学として、いろんな取り組みしようと思っております。また色々ご指導いただけるとありがたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

★★★★アフタートーク（対談を終えて．．．）★★★★

— ターゲットは観光客？地域住民？ —

【真鍋】

それは大きな話で、観光寄りにして観光的に成功できるんだったら、みんなにとってハッピーな絵が描けるのかもしれないですね。ただ、実際年間5000万円ぐらいの維持費がかかっています。入園料も栗林公園と後樂園の入園料は500円に対し、中津万象園は800円なんです。値上げして800円にしたんですけど「やっぱり高いわね」って言われることも結構あります。

先ほども言いましたが、来園者数は栗林公園が60万人、丸亀城が12万人。じゃあ中津万象



園は何人ということなんですよね。6万人が来園すれば観光収入だけで維持できます。しかし現実的にそれは難しいんじゃないかという風になると、どうしても助成金や寄付金に頼らざるを得なくなります。その時、丸亀市民や香川県民を、寄付金の対象として考えるのか。あるいは観光客や広く世界から助けてくれる支援の輪を広げていくのか。

丸亀市民といった地元で頼った場合、地域の中で「本当に中津万象園は必要ですか？」の議論をもっとしなければならない。現にこの間も「中津万象園に丸亀市民は多分あんまり来ないよね」と言われました。ただ、冠婚葬祭での来園はめちゃくちゃ多いんです。前撮りで利用する方がすごく多いんですよ。話を聞くと「うちの娘はここで前撮りした」と言われることも結構あるんです。そういう利用は多いけど、日常的にはなかなか来てくれない。

なまじ綺麗に維持されているので、みんなダメになった時のことは、ほぼ考えていないし、私たち民間が管理していることもほとんど知らない。そうなってくると、行政から500万円の支援金をいただいています、もっと税金を投入してもいいと思えるのかという話が次の議論点になってきます。あるいは企業と企業の境い目を超えて、他人の所有物でも企業が支援したいと思えるか、個人が支援したいと思えるかとなってきます。

観光地として考えるとハッピーな絵が描けるけど、現実的にどう考えるか。地域の資源だとするとそれは本当に地域だけでOKなのかみたいな、今はその境い目にいます。

【安村】

本当に観光に振ってしまえば、それが行きついてしまうとオーバーツーリズムになって地域に迷惑をかけることもあります。本来の観光はまさに地域の光を見せる、地域が魅力を発信してその魅力を見に来てくれることが観光と考えた方がいいと思うんですね。

ここにたくさんの方が来園して、栄えて、丸亀市に中津万象園があるということが地域の人の誇りになれば、それは地域のためでもあるわけです。ですから地域の魅力を見る、見せるというところに集中すれば、地域と観光を対比する見方をしなくてもいいのかなと考えます。当然、集客や市民のためだということを考えると、棲み分けしたいところですが、私は観光という言葉をもう少し地域の光を見せるという、観光と地域を融合させたような考え方ができないかと考えています。

【真鍋】

そうですね。地域の光になったら、どちらも結局自然とできるかもしれないですね。

【安村】

そうした方向にするには、どうやるんだろうというなかなか難しい問題が出てきます。

【真鍋】

そこが解決できたらいいですね。

地域の光なんで観光も地域もどちらも両立できる。それ一番いいですね。

【内田】

これだけの庭園がある街は中々ないので、地域にとってはプライドになるはずですよね。

【安村】

経済的に厳しいというお話は当然出てきますが、それも解決されようとして先ほどのファンドレイジングのように色々な取り組みをされていますよね。

【真鍋】

そうですね。昨年12月の寄付月間にファンドレイジングをした結果、350万円ほど集まったんですね。その時に企業さんで寄付してくださった方から「僕は中津万象園をすごく誇りに思ってる」「こういう場所が丸亀市にあって、人を連れて来たいなって思える場所があることを誇りに思ってるから君たちには感謝しかない」と言われました。こんなにストレートに感謝されたことがなかったので、めちゃくちゃ嬉しかったです。

寄付月間にメールで案内しただけなんです。それでそこまで皆さんが応援してくれるってことが分かったので、なんかもっと広げ方があるのかなと思いました。

【安村】

真鍋社長の中津万象園に対する想いがじわじわ広がっているんですよ。

みんな応援したくなると思います。

— 転機となった経験 —

【真鍋】

中津万象園のことについて最初の転機になったのは、中津万象園は文化財だと思っていたので、行政が調査・研究や魅力の発信、再発見をやってくれるだろう、応援してくれるだろうと思ってたんですよ。

それが京都芸術大学に行ったときにそこで出会った人から「何言ってるの？学芸員の人数なんて限られてるのよ」「そんなの誰も調べてくれるわけじゃない」「自分でやらなきゃどうするの」と言われたのが、一番最初の転機でした。自分でやらなきゃ、誰もこの価値やこの場所が魅力的だなんて、誰も言うてくれないと気づいたからです。でもその人がそう言いながらも、煎茶の研究家の人に「あの庭園は行ったことないけど、煎茶室の気がする」みたいなことを言ってくださって、その先生方を連れてきてくれて、あのお茶席が煎茶席と分かったんですよ。今までは知らなかったんです。「抹茶室なのに解放的で変、掘っ立て小屋みたい」とか言われてたんです。それに対して手を貸してくれる人がいたのはやっぱり一つの転機でした。

あとは建築だと、一時期、姉齒事件とか色々ありまして、建築に対しすごくダーティなイメージを持たれた時代がありました。「どうせ手抜き工事なんでしょう」みたいな感じで、結構言われて「なんでこんなに言われたいかのやろ」とすごく悔しい想いをしました。でも、お客様が建物を立てる時に、どういう想いがあって、どういう夢があって、それを形にするために「あんたのとおじいさんがね、お父さんがね、建ててくれた」みたいな話を聞いたときに「あ、建築ってそういう仕事なんや」「ひとつひとつの仕事にその人の夢を叶える物語があって、めちゃくちゃカッコいい仕事なんやな」と思って。それを発信したらいいんじゃないかと思ったんですけど、なかなか難しくて。難しい中で自社なら何ができるんだとか。中小企業なので、他の企業の悩みもよくわかるんです。

例えば、工場の老朽化問題に対して、みんなは「移転新築すればいいじゃん」と言うんですけど、そんなことが簡単にできるわけがないんです。五千坪も敷地がある、建物がある移転の費用が、どのぐらいかかると思ってるのか。その移転費用が用意できないことは悪いのか？みたいな。中小企業ならではのいろんな課題を聞いてる中で、同じ立場として、うちは何が

できるだろうとか、自分も気持ちが分かるからどうしたら解決できるのかということ、繰り返し考えるうちにだんだんたくましくなっていてます。

【安村】

相当成長されているんですね。

【真鍋】

成長というかどんどんたくましくなっていく感じです。

【安村】

五重塔の修復とかあるんですか？

【真鍋】

あれは新築です。あれも自分のところでは建てられないので、京都から宮大工を呼ぶことができたのが大きいです。それもここ（中津万象園）がきっかけです。

【安村】

真鍋社長の代から始められたのですか？

【真鍋】

いえ、祖父の代です。昭和22年に地元の有志で紫雲出山に桜を植えた時に遺跡が出て、弥生時代の遺跡ということで「遺跡が出た！どうするんや！」となった時に相談したのが、田村実造さん。その人に紹介していただいたのが中根金作さんで中津万象園が修復できた...みたいな感じです。

【安村】

色んなところからストーリーがつながってきますね。

本当に奥が深いです。